

ひささ池の白うなぎ — 本郷 —

昔、むかしのことです。

本郷の村がすごい日照りにみまわれていました。宮川も櫛田川も、ごつごつした川底を見せ、雨水をためる桶おけはどれもすっからかんです。

田の水も、飲み水もなくなり、村人たちは困っていました。

こうなれば、雨ごいでもして、神様にお願いするより方法がないということになりました。

それから毎日、雨ごいをしましたが、どれだけ待っても一粒の雨も降りません。皆は思案しあんに暮れていました。

ある日、村の吾作ごさくじいさんが山へきこりにでかけました。うだるような暑さに、吾作じいさんは、水をもとめて池のある方へと歩いていきました。

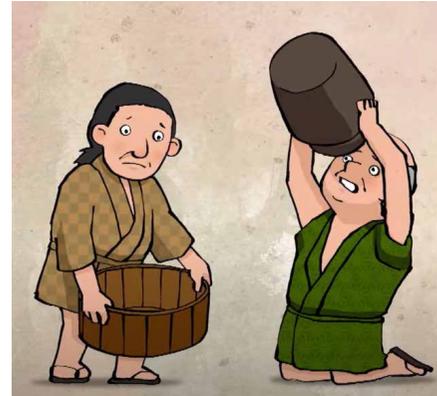
「ああ やっぱりこの池にも一滴の水もない。」

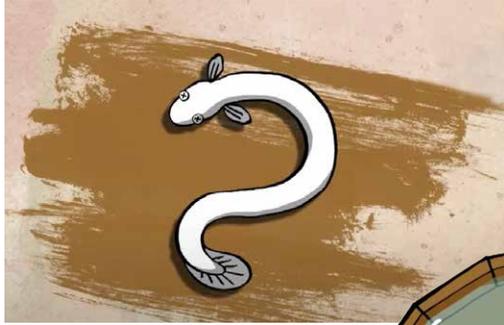
吾作じいさんは、がっかりして、ひたいの汗をふきました。

その時、

「おや！」

と驚きました。底の見える池に、一匹の白うなぎが、息も絶え絶えになっているではありませんか。





吾作じいさんは、
「かわいそうにのー。」
と言って家へ持って帰りました。

そして、自分が飲みたいのを我慢して残してあった水の中に、白うなぎを入れてやりました。みるみるうちに、白うなぎは元気に泳ぐようになりました。

すると、白うなぎを助けてくれた、吾作じいさんのおかげで、雨が降ってきました。それはそれは、たくさんの雨でした。

村人たちは、とびあがって喜びました。

そして、白うなぎを助けてくれた吾作じいさんにお礼を言いました。

吾作じいさんは、白うなぎをひささ池へにがしてやり、それからというもの、このあたりは水不足に苦しむということはなくなりました。

ひささ池は宵の明星が写るといって程、きれいな水が湧き出て、伊勢神宮の土器を調製するのも、ここの水を取って使われました。



ひささ池

キーワード：みんわ、新茶屋、伊勢街道

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんわ』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。